

令和 6 年度ステイクホルダー調査結果に関するまとめ

I. 令和 6 年度ステイクホルダー調査の概要

1. 研究の目的・意義

- ・教育研究活動の質と学習成果の水準を保証し、継続的に改善・向上を図るための基礎データとする。
- ・看護学教育全般ひいては将来に看護学の発展に貢献することを目的とする。

2. 調査対象者

令和 6 年 4 月に、令和 5 年度旭川医科大学医学部看護学科卒業生（52 名）が配属された部署の看護師長 23 名（11 病院）。

3. 調査方法・内容

- グーグルフォームを用い、以下の質問について、1 名の卒業生に対し 1 回の回答を依頼した。
- ・本学のディプロマポリシーに則り作成した質問項目に対し、①思う②どちらかといえば思う③どちらかといえば思わない④思わないの 4 件法で回答を求めた（以下、①②は肯定的回答群、③④は否定的回答群とする）。否定的回答群に回答した場合は具体的な内容の記載を求めた。
 - ・本学の看護教育に対して望むこととして 11 項目を作成し、①改善強化を望む②改善を望む③現状でよいの 3 件法で回答を求めた（以下、①②は改善希望群、③現状肯定群とする）。
 - ・本学の看護教育に対する意見・感想の自由記載を設けた。

4. 調査期間

令和 7 年 3 月 17 日から令和 7 年 3 月 31 日であった。

II. 令和 6 年度ステイクホルダー調査の結果

1. 回答率

17 名の卒業生に関する回答があった（回答率：32.7%）

2. ディプロマポリシーに則り作成した質問項目に対する回答と、否定的回答群の具体的な内容に関する記載

1) ディプロマポリシー1 倫理観に基づいた社会的使命の遂行（姿勢・態度）

(1) 医療チームの一員として高度な生命倫理に基づいた誠実で良識ある看護実践を行う姿勢・態度を身に着けている

①回答の割合

肯定的回答群：13 名（76.5%）、否定的回答群：4 名（23.5%）

②具体的な内容

- ・チームとしての意識があまりみられない。
- ・多少考えてはいると思う。
- ・患者とのトラブルが発生していても報告がない。
- ・その認識がない。
- ・チームで協力すると言うより自分の仕事のみ優先していることが多いように感じている。

(2) 社会に対して看護の使命を認識して実践する姿勢・態度を身に付けている

①回答の割合

肯定的回答群：14 名（82.4%）、否定的回答群：3 名（17.6%）

②具体的な内容

- ・最終実施者としての責任について繰り返し話し合っているが実感がない。
- ・上記（患者とのトラブルが発生していても報告がない。）
- ・目の前のことで精一杯で社会とか、使命とか、を認識しているとまでは、感じられない。
- ・患者主体で考え行動できている。

2) ディプロマポリシー2 地域社会・国際社会へ貢献するための能力（意欲・関心）

(1) 地域から国際社会に至るまで保健・医療・福祉に関する社会的ニーズを踏まえ、看護の実践研究を通して課題を解決する意欲を有する

①回答の割合

肯定的回答群：10 名（58.8%）、否定的回答群：7 名（41.2%）

②具体的な内容

- ・そこまで考えられていない。
- ・いわれたことしか行わない。
- ・新人の時点で、そこまでの意識があるのかが評価できませんでした。
- ・地域や国際社会に至るまでのニーズは考えられていない。
- ・患者個人のニーズにとどまっており、地域や国際社会までのニーズは考えられていない。
- ・研究に関する意識意欲は低い。
- ・現在の実務に没頭し、まだ問にある研究的な視点まで意識を向けられてない感触です。

(2) 「看護の専門職として、たえず自己研鑽する意欲を有する」

①回答の割合

肯定的回答群:16 名（94.1%）、否定的回答群:1 名（5.9%）

②具体的な内容

- ・上記（いわれたことしか行わない。）

3) ディプロマポリシー3 看護学と医療・保健・福祉の看護関連領域に関する十分な知識と生涯学習能力（知識）

(1) 幅広い教養を身に付け、看護の専門知識を習得している

①回答の割合

肯定的回答群:15 名（88.2%）、否定的回答群:2 名（11.8%）

②具体的な内容

- ・日々の業務に慣れることが優先されるため、専門的知識の習得まで至っていない。
- ・今、必要な知識教養を得ることで精一杯。幅広いは難しい。

4) ディプロマポリシー4 問題解決能力、発展的思考能力、研究心（思考・判断）

(1) 研究的視点から看護に対する問題を発見し、その解決のための思考力・判断力を身に付けている

①回答の割合

肯定的回答群: (10 名) 58.8%、否定的回答群:7 名（41.2%）

②具体的な内容

- ・知識を活用することが難しい

- ・思わない、というよりも、身につけていることが理解できるような実践場面を提供できていない。
- ・自分のアセスメントを自ら報告することがない。
- ・新人の時点で、そこまでの意識があるのかが評価できませんでした。
- ・研究的視点からは考えられていない。
- ・日々の業務に慣れることが優先されるため、専門的知識の習得まで至っておらず研究的視点とならない。
- ・研究的視点からの問題発見には至っていない。

5) ディプロマポリシー5 根拠に基づいた基礎的看護実践能力（技能・表現）>

(1) すべてのライフステージ・健康レベルに応じた、根拠に基づく基本的看護実践ができる技能及び表現力を身に着けている

①回答の割合

肯定的回答群:14 名 (82.4%)、否定的回答群:3 名 (17.6%)

②具体的な内容

- ・行動の理由が振り返ることが難しい、無意識に行うことがある。
- ・指導されたことは行えるが、表現力はない。

3. 本学の看護教育に望むことに関する質問項目に対する回答

1) 看護職としての姿勢・態度（社会人基礎力）の育成

改善希望群：6 名 (35.3%)、現状肯定群：11 名 (64.7%)

2) コミュニケーション能力の育成

改善希望群：7 名 (41.2%)、現状肯定群：10 名 (58.8%)

3) 多職種連携を理解し、チームの一員として参加する姿勢の育成

改善希望群：6 名 (35.3%)、現状肯定群：11 名 (64.7%)

4) 地域包括ケアにおける看護実践を遂行する力の育成

改善希望群：4 名 (23.5%)、現状肯定群：13 名 (76.5%)

5) 国際社会における看護の役割について考える力の育成

改善希望群：2 名 (11.8%)、現状肯定群：15 名 (88.2%)

6) 主体的に学習を進め、課題を抽出する力の育成

改善希望群：7 名 (41.2%)、現状肯定群：10 名 (58.8%)

7) 自ら問題解決手法を見出す力の育成

改善希望群：8 名 (47.1%)、現状肯定群：9 名 (52.9%)

8) 研究のプロセスにおける基礎知識の育成

改善希望群：4 名 (23.5%)、現状肯定群：13 名 (76.5%)

9) 研究課題を自ら設定できる力の育成

改善希望群：5 名 (29.4%)、現状肯定群：12 名 (70.6%)

10) 調べた情報を基に問題解決策を論理的に見出す力の育成

改善希望群：8 名 (47.1%)、現状肯定群：9 名 (52.9%)

11) 看護学に関連した基本的な知識を習得し、実践できる力の育成

改善希望群：8 名 (47.1%)、現状肯定群：9 名 (52.9%)

4. 本学の看護教育に対する意見・感想の自由記載内容

- ・配属された新人看護師の個人要因が大きいと思っています。配属希望を個人の性格や特性にあわせて選択できるように勧めると良いと思います。もしくは、個人情報の問題がありますが、看護部長、副部長と情報共有できれば良いと思ったりします。
- ・1年目の看護師として、当院で求めるものよりも、高いものを求めていると感じました。1年目の看護師として、目標はクリアーされております。
- ・1年目の看護師として当院で求めているレベルよりも高いレベルが求められていると感じました。1年目の看護師としての課題はクリアーされております。
- ・基礎学力や看護に臨む姿勢は、しっかり持っています。新人としては十分だと思います。口下手でコミュニケーションが課題のようですが、最近頑張って声を出していますので、これからの成長が楽しみです。
- ・質問の回答選択肢について、研究などまだ経験しておらずわからないこともあるため、この選択肢だと返答が難しい。わからない、未経験などの選択肢が欲しいです。当科に配属された貴高(校)の卒業生は、とても配慮ができて一生懸命学びながら頑張っています
- ・今回の対象者はちょうどコロナ禍に学生時代が重なっていたり、臨床感覚は通常より困難性があった。教育だけでは解決できない環境を経験していた世代と感じていました。

5. 令和5年度ステイクホルダー調査との比較

令和5年度は自部署に配属された新人看護師全体をイメージしながら回答することを依頼しており、令和6年度は1人の新人看護師につき1回の回答を求めている。令和5年度と令和6年度の調査結果が比較できるよう以下の表1、表2に示す。

表1 デプロマポリシーに則り作成した質問項目における令和6年度と令和5年度の調査結果の比較

R6年度：n=17、R5年度：n=11

ディプロマポリシー	R6年度肯定的回答群(%)	R5年度肯定的回答群(%)	R6年度否定的回答群(%)	R5年度否定的回答群(%)
1(1)	76.5	72.7	23.5	27.3
1(2)	82.4	63.6	17.6	36.4
2(1)	58.8	18.2	41.2	81.8
2(2)	94.1	36.4	5.9	63.6
3(1)	88.2	45.5	11.8	54.5
4(1)	58.8	9.1	41.2	90.9
5(1)	82.4	45.5	17.6	54.5

表2 本学の看護教育に望むことに関する質問項目における令和6年度と令和5年度の調査結果の比較

R6年度：n=17、R5年度：n=11

本学の看護教育に望むことに関する質問項目	令和6年度改善希望群(%)	令和5年度改善希望群(%)	令和6年度現状肯定群(%)	令和5年度現状肯定群(%)
1) 看護職としての姿勢・態度(社会人基礎力)の育成	35.3	81.8	64.7	18.2
2) コミュニケーション能力の育成	41.2	72.7	58.8	27.3
3) 多職種連携を理解し、チームの一員として参加する姿勢の育成	35.3	45.5	64.7	54.5
4) 地域包括ケアにおける看護実践を遂行する力の育成	23.5	36.4	76.5	63.6
5) 国際社会における看護の役割について考える力の育成	11.8	27.3	88.2	72.7
6) 主体的に学習を進め、課題を抽出する力の育成	41.2	81.8	58.8	18.2
7) 自ら問題解決手法を見出す力の育成	47.1	72.7	52.9	27.3
8) 研究のプロセスにおける基礎知識の育成	23.5	45.5	76.5	54.5
9) 研究課題を自ら設定できる力の育成	29.4	36.4	70.6	63.6
10) 調べた情報を基に問題解決策を論理的に見出す力の育成	47.1	63.6	52.9	36.4
11) 看護学に関連した基本的な知識を習得し、実践できる力の育成	47.1	72.7	52.9	27.3

Ⅲ. 令和 6 年度ステイクホルダー調査におけるまとめ

1) 回答率および調査方法について

令和 5 年度は、旭川医科大学病院の看護師長 14 名に自部署の新人看護師全体をイメージして調査への回答を依頼し、11 名から回答を得ている（回収率 78.6%）。令和 6 年度は、卒業生 52 名が所属する 11 病院 23 名の看護師長に調査を依頼し、1 名の卒業生に対し 1 回の回答を求め、17 名分の回答が得られた（回答率 32.7%）。調査方法が異なるため回収率の比較はできないが、対象病院を広げたことや年度末の時期も影響してか、回答率の低下がみられた。

しかし、どの調査項目においても令和 5 年度より肯定群の回答が多く、個々の卒業生について回答を求めたことの影響もあるとも推察されるため、回答率が向上するよう検討し、次回以降の推移を確認していく。

2) 調査結果を踏まえた考察

「ディプロマポリシーに則り作成した質問項目に対する回答」では、7 項目中「社会に対して看護の使命を認識して実践する姿勢・態度を身に着けている」「看護の専門職として、たえず自己研鑽する意欲を有する」「幅広い教養を身に着け、看護の専門知識を習得している」「すべてのライフステージ・健康レベルに応じた、根拠に基づく基本的看護実践ができる技能及び表現力を身に着けている」の 4 項目で 8 割以上が肯定的回答であった。中でも、「看護の専門職として、たえず自己研鑽する意欲を有する」に関しては、肯定的回答群は 17 名中 16 名の回答であり、卒業生の自己研鑽への意欲はある程度認められている。一方、これら 4 項目における否定的回答の具体的内容として、現状の業務に精一杯であることが散見され、看護師 1 年目では大学で得た能力を発揮することが難しい状況も考えられる。今回、否定的回答群のみ具体的な内容を聞いているため、肯定的回答群の内容も調査すると、より具体性のある結果が得られると考えられる。

「本学の看護教育に望むことに関する質問項目に対する回答」では、改善希望は多くても 47.1%であり、令和 5 年度のように過半数を越える回答はみられなかった。「国際社会における看護の役割について考える力の育成」では 8 割以上が、「地域包括ケアにおける看護実践を遂行する力の育成」「研究のプロセスにおける基礎知識の育成」「研究課題を自ら設定できる力の育成」では 7 割以上が現状肯定群の回答であった。しかし、「本学の看護教育に対する意見・感想の自由記載内容」をみると、国際社会における看護や研究に関しては、未経験もしくはラダー等で 1 年目の看護師には求めていることから現状肯定群を選択した可能性が考えられる。また、「ディプロマポリシーに則り作成した質問項目に対する回答」において否定的回答が多かった項目として

「地域から国際社会に至るまで保健・医療・福祉に関する社会的ニーズを踏まえ、看護の実践研究を通して課題を解決する意欲を有する」「研究的視点から看護に対する問題を発見し、その解決のための思考力・判断力を身に着けている」があり、ともに 41.2%であった。このように、国際社会における看護や研究に関しては、現状肯定群が多い一方で問い方が変わると否定的回答も多いという結果がみられている。卒業生の身に着いていないのか、未経験等の理由で師長が評価できないのか、自由記載にあるように「わからない」「未経験」といった選択肢を追加する検討や質問項目の見直しを図る必要がある。また、選択肢に関しては、評価基準が明確ではなく、師長の感覚に委ねているため統一した評価基準を設けるといった検討を行っていく。

3) まとめ

以上より、本学の卒業生である新人看護師に関して所属部署の師長を対象とした本調査では、卒業生の自己研鑽への意欲、姿勢・態度、知識の習得、技能及び表現力の面で肯定的な評価がみられた。

しかし、就職したばかりで精一杯であること等が起因し、卒業生が本学で得た能力を十分に発揮できているか、未経験等の理由により回答した師長の意図を適切に解釈できているかという点で課題が残った。また、今回の回答率から本学の卒業生全体の結論とするには限界がある。調査対象の経験年数を上げると、本学で修得した能力以外に就職後に得た能力が反映される可能性や、対象の就職先を把握するが困難になることも考えられる。

今後、ステイクホルダー調査が学習成果の基礎データとしてより解釈しやすい調査となるよう、回答率の向上を目指すとともに、卒業生がディプロマポリシーに掲げる能力を身に付けているのか否かを解釈しやすい調査にしていく必要がある。また、臨床で新人看護師に求めていることと質問（ディプロマポリシー）の乖離があることもわかったため、質問項目や問い方の見直しが必要である。特に、国際社会における看護や研究に関する項目では結果の解釈が複雑であったため、卒業生は看護師1年目であることを念頭に置き、質問項目や選択肢の見直し等の検討を行っていく。

以上